



15周年に寄せて

## 日本の文化における 企業財団の役割について

文化庁長官

河合隼雄  
Kawai Hayao

このたび、財団法人花王芸術・科学財団が法人設立15周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

貴財団は、法人設立以来、美術、音楽分野を中心とした芸術文化活動支援だけでなく、学術研究に対する助成活動にも力を注がれており、私たちが豊かな生活を営んでいく上で必要不可欠な文化と学術の発展に大いに寄与されてきました。様々な支援対象が考えられる中、文化と学術に支援の必要性を見出された花王株式会社、財団法人花王芸術・科学財団をはじめ、関係者の皆様に対し深く敬意を表します。

近年、企業財団の文化芸術活動によりメセナ活動が注目をされており、多くの地域の方々が様々な文化に触れる機会が増加したと言われていています。文化庁におきましては、文化の力で日本を元気にしようと様々な取組を行っているところでありますが、我が国の文化力向上のためには、貴財団をはじめ民間における積極的な支援活動が必要不可欠です。特に企業財団による文化活動支援は、経済情勢の厳しい中であっても、継続的な支援が行われており、支援を受けている多くの団体から高い評価を受けています。また、各企業財団においては、それぞれ独自の観点から様々な支援活動を実施していただいているところですが、このことは我が国における多様な文化芸術活動を振興していくという意味でも、大変重要な役割を果たしています。

文化は人々の心に豊かさを培い、潤いを与えるとともに、社会を活性化することができます。文化庁といたしましては我が国の文化力向上のためにこれからも企業財団と積極的な連携を図ってまいりたいと考えています。財団法人花王芸術・科学財団におかれましても、15周年を契機にますます発展され、芸術文化団体への活動支援を末永く実施されますようお願い申し上げます。



## 文化支援の拡充 15周年を祝う

理事

芸術文化部門(音楽分野)選考委員長

海老澤 敏

Ebisawa Bin

花王芸術・科学財団設立15周年という記念すべき祝年を迎えて、貴財団の芸術文化部門の活動にお手伝いさせていただいております立場から、心よりの祝辞を申し上げたいと存じます。

貴財団のユニークな助成活動、支援活動、そして関連事業の展開には目を見張らせるものがあります。それは花王の豊かな企業活動が、人間それ自身の美のあり方を見据え、その実現を究極の目的としており、そのために精緻な科学的研究の遂行を要請され、しかもそれが美の創造と有機的合一を果し、そこに調和の世界を顕現させているためであります。

こうした企業としての思想が、貴財団の上記活動にまこと見事に結実し、そして芸術文化活動への助成の形で、さらに一層の社会的還元、社会的貢献をおこなっておられることに、私は深甚なる敬意を表したいと存じます。

私はまた、科学技術研究への助成と芸術文化活動への助成が、かつては別々に進められていた花王のメセナ活動が、ある時点から一体となり、以後、貴財団のそうした総合的な活動が一層の輝き、煌めきを増している現況を拝察するにつけ、その慧眼にも深い感動を覚えております。

貴財団の向後のますますのご発展を祈りつつ、祝辞とさせていただきます。



## 厳正かつ公平な 選考基準を貫く

理事

芸術文化部門(美術分野)選考委員長

富山 秀男

Tomiyama Hideo

花王(株)のメセナ活動は、早いころ読売新聞社が組織した美術館連絡協議会のスポンサーとして、美術界では誰知らないものもないほど有名だったが、それを継続しながらさらに単独の財団法人を発足させ、より幅広い充実した支援態勢をとってくれたことは、私共として実に感謝にたえないところだった。

いま財団設立後15年の歩みを顧みるとき、美術展開催の援助と美術研究の助成という二部門が着実に定着、これに採択されるかどうかが主催者の苦楽の分かれ目となっている。すなわちさきの協議会に加盟する施設かどうかの区別なく、広く応募でき、個々の内容の適否が厳正にチェックされる選考基準の公平さが特色だからである。

音楽公演に較べれば美術展覧会への支援は、件数も金額もその半分ぐらいだが、その有効性は具体的事例をみれば一目瞭然といってもいい。それに対して、美術研究は、その逆で多い。ただし最近では応募数が激増しているうえ、古今東西のテーマをかかげるので、殆ど対応に窮する思いをしているのも事実だろう。



## 「より人間性豊かな社会」を 目指して、財団の発展を願う

理事

芸術文化部門(音楽分野)選考委員

植木 浩  
Ueki Hiroshi

「花王芸術文化財団」が、文部省の認可を得て設立されたのは、平成二年の秋である。当時、「企業文化」「企業市民」「メセナ」など耳新しい言葉が盛んに使われるようになり、企業と文化の関わりについて見直す動きが高まりつつあった。

財団の芸術文化への助成事業も着々と進み、高い評価を得つつあったが、その後、これに学術研究助成の事業が加わり、「知的精神活動としての芸術文化活動と科学・技術の総合化」という未来に向けての新しい取組みに着手し、財団の名称も「花王芸術・科学財団」に変わることとなった。

私自身、文部省で学術行政、文化行政などを担当したこともあることから、2世紀の日本は、R&D (Research and Development)とA&C (Arts and Culture)の融合への挑戦が、新しい発展への扉を開けることになるのではないかとの小論を書いたことがある。それも一つの参考になったということに関係者の方から伺ったことを懐かしく思い出す。

古代ギリシャにおいては、もともと芸術も技術も、「テクネー」という一つの言葉に包含されていたといわれるが、芸術文化と科学・技術の総合化の問題は、日本にとっても世界全体にとっても未来に向けての大きな課題である。

創立十五周年をお祝いするとともに、より人間性豊かな社会を目指して、「花王芸術・科学財団」の益々の発展を心から願う次第である。



## 財団設立15周年に

理事

芸術文化部門(音楽分野)選考委員

丹羽 正明  
Niwa Masaaki

企業の繁栄というものが、その内部努力に加えて、製品を購入する消費者の支えが同時に不可欠な要因であることに思いを致して、利益を社会に還元することを当然のように実行して下さる企業があるのは、まことに有り難く、喜ばしいことです。

花玉株は、社風として、以前から芸術文化に理解が深く、さまざまな支援活動を企業自体として行ってきたことは、広く知られておりました。創業100周年を記念して、支援活動の恒久化と更なる発展を図って、財団が設立された時、世間はそれを単なる一時の思い付きとは捉えず、従来の企業姿勢の延長上に位置付けて受け止めたものでした。

財団は、やがて学術研究助成にも事業を拡大し、芸術と科学の両分野に跨る共同研究シンポジウムを実施するなど、実にユニークな発展を遂げて参りました。

私どもの専門分野である音楽に関しても、音楽公演や創作発表活動への助成に加えて、音楽学研究も当初から視野に入れて下さったことは、大変有り難いことでした。音楽文化において、本来、実践と研究は車の両輪にも譬えられる必須の二分野ですが、公的助成や他の財団のケースを見ても、前者にのみ助成対象が偏っているのが実情ですので、これは極めて貴重な在り方です。まさに「芸術・科学」財団という名称に相応しい活動と申せましょう。今後とも、多方面にわたり、一層ユニークな発展を願って止みません。



## 表面・界面の科学の領域へ 大きな貢献をなした 15年

理事

科学技術部門 化学・物理学分野 選考委員長

井上 祥平  
Inoue Shohei

花王芸術・科学財団設立 15周年にあたり、心からお祝いを申し上げます。

本財団の名前から誰もがすぐに連想するのは石鹸です。その特性である界面活性を代表とする表面・界面の科学の分野において、若手による独創的・先導的な研究に対して顕彰と助成を行い、この領域の発展に大きな寄与をなして来られた財団に深く敬意を表します。

身の回りのすべての物質には表面・界面があり、物質の内部とは違ったその性質は非常に興味深いものがあります。応用面を見ても、界面活性のほか触媒作用、電極反応など表面・界面の科学の対象はとても広い範囲にわたっています。表面・界面は物質の全体から見ればごく一部分であり、その状態を調べることは大変困難な課題でした。しかし近年、種々の測定法の著しい進歩によって表面・界面の構造がだんだん明らかになり、またその構造と機能を制御することも可能となってきました。これらに対応して、これまで顕彰と助成の対象となった研究の主題は実に多様であり、それがこの事業の特徴となっています。

表面・界面の科学は今新しい段階を迎えています。表面・界面ならではの新現象の発見と応用への展開が期待されます。本財団の顕彰と助成がこの分野の発展にいっそう大きく寄与することを願って、お祝いの言葉と致します。



## 日本の生命科学の発展に 寄与することを願う

理事

科学技術部門 医学・生物学分野 選考委員長

宇井 理生  
Ui Michio

花王株式会社の主力製品の開発研究に最も貢献のあった科学分野である表面科学が、花王芸術・科学財団の顕彰、助成の対象となったのは当然のことであろう。表面科学とは、その名称、内容いずれも確固とした物理化学の一分野である。一方、生命科学にも寄与するべく、花王の研究開発に関連し、且つ表面科学に対応する生命科学分野も同様に顕彰、助成の対象しようという方針でほぼ同時に発足したのが、以来、私が選考委員長を仰せつかっている現在の「表面の科学、医学・生物学分野」である。

この分野は新しい、というよりは分野の設定が新しい、というべきであろうが、そのため古くから確立している表面科学が圧倒的な「兄貴分」であるのは当然だが、表向きは「対等」のような体裁を整えるために「兄貴分」を代表される井上祥平先生には大変なご迷惑の掛け通しだった。今の分野名称に落ち着いたのは平成 15年度であり、その頃から、奨励賞推薦件数、助成申請件数は、一応「兄貴分」と肩を並べる程度にはなった。しかし、毎年 5-6月に行われる成果報告会では、内容的には「兄貴分」に比べてまだまだという印象である。井上先生は、「隣家の芝生の方が、より緑色に見えるのですよ」と慰めて下さるのだが、どうも、我が家はまだ若草色のようなのである。

幸いにして、私以外は現役の若手ないしは中堅の教授達である選考委員は、多忙な研究生生活の中を全候補者対象の個別評価メモを作成し、事務局の協力を得て詳細な選考委員会議事録を毎年残す努力を続けている。また成果報告会に全員出席して、選考結果に反省を重ねるのも毎年の恒例となっている。世間的な評価の定まっていない若手研究者の評価は難しい。日本の生命科学の今後の発展に少しでも寄与することを願う。